Vassar
HQ
1104
J74+

Oct. 1894
no. 400

明治十八年初刊

女學雜誌

毎週土曜日發兌

第四百號

要目

社説
雜誌月刊に改むるの辭◎皇天の冥助◎眞の國民◎看護婦の缺乏◎基督教青年渡海すべし◎眼前の美談

隨感
猛者のなさけ◎女生戰を好む乎◎夜更けて太淸の志士を憶ふ◎遺憾砲雲を望む

徒然草
落花(白衣)
乙女(泡鳴)

家政
戸内戰時のいましめ(山下石翁)

明治二十七年十月六日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第四百號目録

社説

雜誌月刊に改むるの辭

皇天の冥助

眞の國民

看護婦の缺乏

基督教青年渡海すべし

眼前の美談

隨感

猛者のなさけ

女生戰ひを好む乎

夜更けて太淸の志士を憶ふ

遺憾砲雲を望む

論説

外美内醜の僞德(下)潮陽

(六)自然の容貌と人類の容貌(七)其の研究の必要(八)内美外醜の現象(九)内外双美の理想的現象(十)國家の外美内醜(結言)假象と實象、假情と實情

徒然草

落花(白衣子)

乙女(泡鳴子)

兒鑑

勇士最後の手紙(下)幸子

史傳

熊澤蕃山(其五)橋本又作

時政を論じて罪を得

錮中の境遇

家政

戸内時のいましめ(山下石翁)

閑書

廢娼論につきて(城常三郎)

寄書

御國の歌(中村與)

時報

婦人共立育兒會〇宮城婦人の義擧〇大分婦人の義擧〇土佐婦人の義擧〇髮を斷つて夫を勵す〇山本鶴子〇大尉の夫人〇神田中尉の未亡人◎支那服裝の日本人〇上毛の廢娼

悲劇 魂迷月中刄 (阿波寺鳴門左衛門)

一名、桂吾良。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治二十七年十月六日發兌

第四百號

社説

雜誌月刊に改むるの辭

明治十八年初めて女學雜誌を刊行してより、少くとも月二回、多きときは月五回の發兌を爲しぬ。凡そ現在雜誌數百種ありと雖ども、毎週の出版を爲すものは、兩手の指を屈なふに過ぎず。然るに、女學雜誌は、其齡ひ尤とも老るくして、而も倘ほ此異數者の中に列し、毎週頻發の榮に預かり來れるは、單に愛顧の知己多くして讀者が之を棄てざるの致す所なり。當に彌よ發奮して知遇の恩に酬ふべきに、今ま俄然として最少の數にひそみ、今后、僅かに月一回の發兌となさんとするは、眞とに已むことを得ざるものあるが故なり。

編者は、近時、日本人が海外傳道に着手す可き聖機の到來したることを認識し、其の將來に於ける大國是たる可きことを確信し、之が爲めに力を盡すとの極めて必要なる所以を感覺せしかば、數ケ月前來、大ひに同志と相謀る所ろのものありき。然るに、天運到來し、國家大ひに動き、忽然として帝師外に正義を主張するの機會亦顯現したるが故に、吾黨が所懷彌よ切迫し、責を感ずるの一層洪大なることを覺ゆるに至りたり。」此に於てか、編者は同志の驥尾に附し、此の精神實行の爲めに大ひに力を盡さんことを決したり。爲めに時を要し、力を要し、亦た四方周流の暇を要すること多からんとす、故に豫かじめ先づ女學雜誌の割愛を要めざるを得ざる也。

凡そ、十年の舊事業は、たゞならぬ情愛を生ずるもの也。編者が女子敎育に於ける即はち是れ也。編者は、從來幾多の事に於て先輩の後塵を追へり、精神の發動せる所ろ、必らずしも、所云る女子敎育其事のみにはあらずと雖ども、主として其の一身を許與したる所ろのものは、即はち女子敎育の道なりき。女學雜誌が、社會万般の事に同情を表せんとするに拘、はらず、嚴然、題して女學の雜誌と號するものは即はち此の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

由縁なり。

然るに、編者は、今后凡そ二年を期して、日本人海外傳道の事業の發企の爲めに、其の多くの力を献げんとす。女子教育專門の事業よりして此事を見れば、縁故太はだ近からざるが如く、吾が十年の舊知己は、此一點に於て編者が操を動かしたるかを奇しまる丶ことなきにあらじ。然れども、編者は、東洋に立てる大日本の天職を念ひ、宗教的東方問題の益す切迫することを感じ、國民對外思想の靈洗を受けざる可らざることを認め、國內教勢の大ひに革新せざる可らざることを信じては、大日本海外傳道の事業の、極めて緊要、極めて有益なることを覺悟し、此が爲めに編者が小身を献ずるとの太はだ感謝すべきことを念ひ、十年の舊知己は、情想必らず悟徹して、終に編者が眞衷の在る所ろを察了せらるべしと信じ、則はち敢て不安の想なきことを得るもの也。

況んや、編者が女子教育に於ける、到底全く因縁を絶つこと能はず。更に所云る「女學」なるものに對するに至ては、一生の小抱負固より之を壓滅することを得ず。更に況んや、多年の同人既に少なしとせず、皆な相助けて女子教育の道を彌よ發揮せられんとするものあるに於てをや。故に、女學雜誌は、今后たとひ月一回の發兌に止むと雖ども、其紙數、其分量、其品質に於て、必らずや、過去と大差なきに至らん也。讀者冀はくは、多年の情誼を念じ、編者が微衷を察し、女學雜誌の孤忠を憫れみ、編者が新たなる事業に對して同情を惠まるると共に、此の老旗幟の爲めに熱愛を寄することを減じ玉ふ莫れ。

以上の事由により、女學雜誌は、左の改則三條を告ぐ。

一　女學雜誌は、其の從前の狀態を保存する外に、新たに海外傳道（特に先づ朝鮮傳道）の事業に贊翼し、其の機關となるべき事。

二　女學雜誌は、其の第四百三號より毎月一回發兌に改たむべき事。

三　一回發兌の女學雜誌は、紙數を三十六頁以上とし、定價を一冊十錢、一年一圓と定むべき事。

附言

「評論」は十月分限り二年間休刊し女學雜誌中に合併す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

皇天の冥助

謹しみて近來の事歷を惟んみれば、冥々として天佑の吾國に加はれることを識認し、恭懼感激の念ひ禁ずること能はず、蓋し大日本、國を立つること二千六百歲、仁義の素養山海よりも高く且つ深遠なり。東方問題やうやく切迫するに及びて、則ち其門戶を世界に開かしめ、着々文明の新空氣を調和せしめて以て大ひに東洋開導の天職を盡さしめんとす。天啓の默示いやちこにして嚴そかなり。吾等、眞ことに其威光を拜し、肅然として戒愼の念ひ止むことなし。同胞よ、同胞よ。此の意識果して妄なるか。看よ、近日の事變、すべて是れ天の冥助にあらずや。何人も、此回の義戰を製作したることなし、而して、天は義の爲めに吾國民を用ひ玉へり。天は、少數の同胞を殺ろして、吾國民惣躰を生かし玉ふ。天は、東洋の一部を殺ろして、其の全躰を生かし玉ふ。吾等もし天命に聽き、天意を奉じ、謹しみて威嚴の指導する所ろに忠順せずんば、則はち禍災立どころに至らん。同胞、深く感謝すべし。而して亦た大ひに戒愼すべし。

眞の國民

大日本が、全世界に誇り示し、之に力ある新らしき敎訓を實際に施こすべき幾多の題目中、正に其の最大なるものの一つとして算すべきは、則はち「國民」と云へるものの意義、標本これ也。

人種一、言語一、歷史一、皇帝万代一系、國土古來常に同一君臣とし、同胞とし、祖孫としての緣故歷然として古今明らかに存すること、吾日本の如きはなし。凡そ、國民としての同和一致を形成すべき資格は、すべて日本に於て、尤とも完全に尤とも悠遠に具備せられたり。國民として日本の如きは、當世万國に比類なき所ろなり。

日本が、世界に發揮すべき天職の一つは、「國民」たるものの最上標本これ也。

看護婦の缺乏

赤十字社は、やうやく看護婦の欠乏を感じ出せり。而して、其供給を、尤とも多く基督敎界に向つて懇望せり。之が爲めに、起つて應ぜんとするもの尠からず。吾人が密か

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に聞く所ろによれば、殊勝なる獻身者を、所々の女學校に於て見んとする也。

惟ふに、此回の戰かひや、甚はだ長年月を要すべし。特に看護の事に於ては尤とも然りとす。姉妹の志あらんものは、大ひに準備して、時の招きに應ずるの覺悟を爲すべし。

基督教青年渡海すべし

戰鬪線內には、軍醫あり、兵站部內には、赤十字社あり。左れど、兵士の數に三倍すべき人夫人足の爲めには、醫藥の備えあるとなし。況んや、行軍往來の途上、兵士と雖ども尙ほ病んで遺さるゝもの多かるべく、傷つきて速やかに看護を受くること能はざるもの亦多かるべし。

夫れ、見へざる所ろに見、遺ちたる所ろに拾ひ、衆の爲さゝる所ろ、爲しがたき所ろに辛苦するは、卽はち基督敎徒の使命にあらずや。

吾人は有志の青年が、身を挺して此等の救濟に任ぜんことを勸告す。もし其誠意隆んならば、渡行の方、支給の途、自づからにして開けんか。今は、寧ろ其人あらんことを待つ耳。

眼前の美談

我國古來、此回の戰の如きはあらず。啻に、朝鮮八道、支那四百餘州と相ひ戰かふのみにあらず。眞とに全世界と面對して堂々の義戰を爲しつゝある也。此を以て、國民の勃發、一和、亦た此回の如きは鮮なし。氣魄、獻身の隆んなると、亦た此回の如きは稀なり。

此に於てか、國民の美質櫻花の爛熳たるが如く煥發し、天禀の特長、朝日のにほふが如く薰揚せり。看よ奉公犧牲の念、何如に高き。看よ獻身敢爲の氣慨、何如に盛んなる。其の戰かふ樣の何如に勇ましきや。其の戰かひに趣むく樣の何如に麗はしきや。嗚呼、於戯、今の時は、日本の春なり、今の日本人は、日本國民の花なり。

列代の　聖皇一百二十一、世々仁帝を戴だきて神洲の金冠つねに燦爛たり。左れど、允文允武、帝德洪大、神化古今に超絕するの　皇帝は、臣民則はち今代に於て方さに現に奉戴することを得る也。

而して、國民個々の良民となれると、亦た方今の如きは稀な

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

り。勇士の雄々しき佳人の貞正なること、方今の如きは亦た稀なり。眼前美談多し、君子比隣に現在す。安くんぞ古道を青史にのみ探ることを要せんやしも。倫理上の美なる實例を求めんとせば、則はち眼頭にあり。もし愛國正義の潔よき人物に會はんとせば、目前にあり。現代將來幾千年、日本の盛觀は即はち今日にあり。吾等生れて如此き時節に際會したるは、抑そも何等の光榮ぞや。

隨感

○猛者のなさけ

眞との優しき情けは、剛勇の心ならでは宿ること稀れなり。小說理想紳士の作者が、Tenderness は Strong Nature にのみ附屬すと穿ちたるは、人生を熟知せし言葉なりとす。たとへば、猛虎高く山月に叫ぶの時、露點々彼が切なる愛慕の情をうるほすに左も似たり。此を以て、勇士外に戰かふこと激烈なるときは、家に歸つて些少の强語をすら吐くこと能はず、只管らに物の哀れに動きて涙潸々たらんが如し。故に敵多きものは、亦味方多し、味方を多く作るにはあらず、自から味方たらざるを得ざるもの生じ來るのみ。われ、密かに、グラドストン、ビスマーク等の家風につきて察する所ろのものあり。具翁、家に歸れば魯なるが如く、屢ば兒童に欺かる。微翁、家に息へば眠れるが如く、花にほゝえみ、犬に戲むると。嗚呼、彼等が外界に於ける激戰は、家に於て自から此の優柔たる軟和に隱れしめざるを得ざるなるべし。此に於てか、巨燵辨慶の太だ弱く、宿六將軍の意苦地なき所以を知る。對外硬の貴むべき所以、また此邊にある也。

○女生戰ひを好む乎

宣敎師諸君、其が敎育する日本女生が目下の激昂を見、驚ろき歎じて曰く、日本人のいくさ好き何んぞ如此く甚しきやと。其意、けだし慘酷を卑しむもの丶如し。日本人豈に戰かひを好くものならんや。一旦、義の爲めに起てば、生命を鴻毛よりも輕ろしとす。卑怯臆病は、その尤とも恥る所ろ。古來英雄の血、婦女子が五體に溢流し、脈々と

して響きあり。

左れど、彼等が時に如此く勇猛なる所以のものは、亦彼等が常に貞柔温和なる所以なり。日本の婦人は、重傷の療治にすら、魔酔薬を用ふるヿを恥づ、況んや産蓐に西洋婦人の如く號泣するヿをせんや。彼等は、平時に於て、出射張るヿなし、然れども、事あるとき逃るゝヿなし。誰か、彼等を目して惨酷なりと云ふ。其の勇猛なるは、即はち其の優しき所以なり。今日事あり彼等を無情なりとするものは、明日事なき時彼等を因循なりとするものならんのみ。

○夜更けて太清の志士を憶ふ

平壤、海洋島の捷況、彌よ分明なり。先づ、神明に奉謝し、且つ、天皇の御稜威を慶賀し、夜、靜かに孤燈の下に沈思すれば、凄然として悲哀のおもひ禁ずべからず。嗚呼、噫、太清四百餘洲の民よ。不幸、汝を敵として吾國の義を顯明せざるを得ず。汝、孔孟の國を國として而も時の腐敗に濁り、徳政久しく廢れて、忠情寄する所ろなく、もとより幾多の人物もあるべけんに、振はざるヿ則はち如此し。尨大の國と、巨多の人とを以てして、尚ほ脆ろきヿ既に如此し。社稷遠からずして覆がへり、國礎久しからずして壞れんとき、愛國志士の恨み抑そも幾何ぞ。嗚呼、吾黨豈に天成の讐ならんや。志士は即はち衷情の友なり。遥かに念ふ、太清、正義の人。速やかに起つて大ひに國弊を更ため、隆んに經綸を施こして、早く長夜の眠を破るべし。如此くして、共に東洋革新の偉業を成立せば、愉快それ如何んぞや。

○遺憾砲雲を望む

鬱勃たる戰氣を强ひて沈靜し、慷慨大有爲の氣骨を軟らかに撫で、砲聲に遠ざかり行きて山野に耕耘し、遲鈍なる牛の歩みを眺めて、鋤鍬に杖つく人の感慨やいかに。戰報切りに到り、武勳太はだ輝やき人心動搖して四面尤とも熱狂するとき、徐むろに書を開きて哲理を講ぜんとするものゝ抱負やいかに。嗚呼、人々、尤とも其の責任を盡さずんばある可からず。覺悟は、平生にあり、準備の機、寸刻も絶えず、日常、當任の義務を理めずんば、彼に相應せし招集あらんの日、そも何の辭ばを以て之に應ぜんとする乎。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

論説

外美内醜の偽徳（下）

潮陽

（六）自然の容貌と人類の容貌

春氣駘蕩、軟風そよ吹き、天地改まりて萬朶の櫻花笑ひ、桃李色を競ふ。吾人は其春なるを知る。樹木鬱蒼、炎熱やくが如く、庭前の草葉の茂る。吾人は其の夏なるを認む。唧々として虫鳴き、落葉摧をなす。吾人は其の秋なるを悟る。六出紛々として窓を敲き、天地悉く銀世界となる。吾人は其の冬なるを覺る。蓋しこれ自然界の容貌なり。翻つて吾人々類を察するに内心、怒る時も、娯しき時も、喜ぶ時も、又悲む時も、殆同一の笑顔を呈することあり。所謂「悟られまじと泣顔隠くして笑ひ顔」となることをなす。又内心、耻かしさ愈や増さる時も、腹立つ時も、泣く時も、滿面朱をそゝぐことをなす。後面より眺むれば千兩の價ひある者、前面より眺むれば、一文の價ひなき者、吾人は市上に於て屢々之に接す。内と外、心と身これ一躰にして相關複雜たり。然るに社會の進歩は一見して内外と心身と相表裏して、容易に判知し得ざらしむるに至れり。世人往々曰く、彼れ外面、菩薩の如く内心、夜叉の如しと。噫これ何等、不吉の形容詞ぞや。眞に忌まわしき限りならずや。眞個に其の人を敬愛するの念慮なくも、威儀を正して敢て尊敬の象を表すれば、禮儀に適ふとせられ。男々しき峻節、千秋不變の貞操あらざるも、花顔、柳姿の容態あれば、佳人として敬せられ。内に財産の餘裕なくも、誇り顔に美衣を飾れば紳士と思はれ。自から信じ自から欺かざるの操德なきを顧みざるも、虚禮に拘泥すれば、德行家と認めらるゝなり。噫、内心、出馬奮戰するの眞勇なく、徒らに大言壯語する、卑劣ならずや。内德を修養せずして、外形を装飾することをのみ力むる者は、眞に賤むべく嫌ふべし。夫れ外表玉の如く、渾然美麗なるも、内心の敬德を切瑳琢磨せずんば、社會の進歩を害し、人品を損し、國民の品格を破却するに至る者なり。かく審美偽德は、美の理と德の理とに反し、自然の天眞と人情の秘奥とに背く者なれば、吾人は痛たく之を恐れ、謹み愼まずんばある可からず。

（七）其の研究の必要

通常、劇場に於て、俳優が惡人を扮するや、其の面相を如何にも惡くしげになすが故に、一見して其の惡人たるを知る。されど實際の社會に於ては、必すしも面相の如何を以て容易に律す可からざる者あり。閉花羞月の美形にして殺人犯あり、太繿の所謂醜婦にして貞操なるあり。近時の詐僞師は紳士の如く、僞證罪犯往々にして、富貴なるあり。奸惡の人必ずしも演劇の雲助と同一の面相あるにあらず、善良の人必ずしも美相あるにあらず。之を以て昔時、板倉勝重は罪状を裁判するに當り、常に襖一重を隔離して、唯罪人の言語を聞き敢て其

の容貌を見ざりしと傳說す。一理ありと云ふべし。蓋し面相なる者は、變化する者なり。彼の或種の虫類が、生存競爭上、己が常住寄食する木皮、草葉の色彩と、己が身躰の外皮の色彩と同一色となりて、强者、掠奪者の目を逃るゝ如く、惡人にして惡相あらんか、直ちに惡人たるを知らるゝが故に、外、美を飾り、成る可く世上の善人と稱する者の外貌擧動を扮して、以て制裁を免かれんと欲す。於是乎、自然に又人爲に淘汰せられ、面相に變化を生ずるなり。

今時の裁判は所謂證據裁判なり。之を以て奸惡の徒は法律上の規定の外、亦道德を顧みず。從て外貌擧動の如きは裁判上一見不用の觀なきにあらず。されど是れ半面の觀察ならんのみ。見よ、裁判醫學、刑事人類學、犯罪學の進步は、駸々として効績を現はさんとし、着々として實効を奏せんとするにあらずや。吾人は如何なる人、最も外美を飾るや。外美を飾ることを力むると共に、內醜僞德は如何程增減するや。外美の裝飾は如何程、內醜を隱蔽する力あるや。如何なる外美が如何なる內醜に伴生するや。等に就き、之を普通人に就て、瘋癲病院の患者に就て、諸所の監獄の犯罪人に就て、或は多衆の集會に於て、心理、審美、倫理、生理、病理、社會學及び犯罪學の方面より、銳利なる眼光もて、精細の觀察をなし、緻密の硏究をなし、大數的に統計するに至らば、社會道德の進步に對して、莫大の利益を與ふると疑ふべからず。

如今、國家多事、人事日々非なるもの多く、內地雜居の制度は、五ヶ年後に實施せられんとす。此時に際して我が國民道德の狀態を顧みるに、吾人は我大和民族が僞善、僞德の現象の甚だ僅少なるを祝賀せずんばあらず、喜怒哀樂、色に形さゞるを以て我が武士道の美德とはなす。然れども諸他の人種雜居するに至り、經濟上、社交上の關係愈複雜し、益繁多となるに從ひ、外美內醜の僞德の一層減少せんことを望み。併せて彼れ外人等の僞德の現象を察して、其の眞相を看破するの明あると極めて必要なりと信ず。

（八）　內美外醜の現象

前述せる外美內醜の現象に對して、斯に內美外醜の現象あり。內美外醜とは、外形に拘泥せずして、內德をのみ顧みるもの是れなり。斯に所謂「醜」とは、絕對的審美上、絕對的倫理上より云ふものにして、相對的に之を察すれば、「醜」と云はんより寧ろ、不得止の苦痛、社會と個人との衝突競爭の波瀾と稱するの勝れるに若かざる者あるが如し。基督の十字架上の死を始め、ソクラテースが獄內に毒害せられたる。ガリレオ、ブルノー等が眞理を確信して火刑に處せられたる。常盤御前が愛子の將來を想ふて、操を破りたる。母親の聲あらゝげて兒女を戒むる。可愛の子に旅立たする。赤貧洗ふが如くして、堅志學を愛する等。其他種々の現象あり。之を指して、內美外醜と云ふを得べくんば、內美外醜や、親はしく羨ましきものにあらずや。右の如き行爲は、吾人平生之を摸範とするとあり。又此等以上は、爲し能はざる者の如く思惟することあるなり。蓋し之を慕ふ所以の者は、目的と手段と相撞着せざるが故ならざるを得ず。即ち善眞の目的を

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

達せんが爲めに、止むを得ざる手段として現はれたる者なればなり。而して外美內醜の僞德に至りては、必ず好ましからざる目的ありて存す。之れ吾人の後者を賤む所以なり。

善と美とは必すしも伴生する者に非ず。然れども內德確乎、志を挫折せずして、社會の害惡と競爭する、烈婦、勇士の行爲は善の主となりたるより、美と稱せらるゝ者なり。假令外部より審美的に之を見て多少の缺點ありとするも、善德を主とする者ならんか、大凡美なる者なり。而してかの內德ある者の往々にして不幸なるは、社會の組織不完全に、人情の整理完備せざるによる。斯かる時代に於ては內外双美にして、善は善報を得、惡は惡報を得るに於て適切なると能はざる者なり。

以上は善良なる性質を帶ぶる內美外醜の現象也。然り而して斯に、其の精神を摸倣して一種の弊害を生する者あり。例へば一團の會合を組織して、之を贊成し之を盛大ならしめんと欲せば、心中に盛大を希望するのみならず、之が爲めに多少の奔走する所あるを要する也。又此に心をのみ主とする弊あり。例せばかの敎會に屬する所謂信徒の、常に缺席して而かも信仰厚しと云ふ者の如き即ち是れ也。又男女の交際の方法上、社會の習慣輿論に反すれば、相互の心中潔白なるの故を以て、其の制裁を免るべからざる如き即ち是れ也。されば內德の正しきを示さんと欲せば、良心の制裁の外、社會の習慣、輿論なる者に從はざるを得ざる也。心美なりとて特更に破れ衣着る如き稱すべからず。

さればにや世上、社會の輿論は即ち倫理の標準なりと說く者あり。然れども社會の輿論なるものは、甚だ漠然たるものあるを免れず。有識有力の先進少數の意見なるか、多數民衆の意見なるか、若し前者を指しとせば、少數人の外は之を覺知すべからず。若し夫れ後者を指すとせば、社會進化の程度によりて、曖昧模糊たるものあり。我が此に云ふ社會の輿論とは、前者を指すものなり。然れどもこは、普般に覺知せられざるものなるが故に、「多數人」の、社會的倫理標準と云ふを得べく、決して「萬人」一統の標準とするに足らざる者也。社會の輿論に服從せば、基督は十字架上の死なかりしなるべく、ガリレオ、ブルノーは火刑に處せらるゝとあらざりしならん。ソクラテースはアゼンス人多數の爲めに毒殺せらるゝとなかりしならん。史上の所謂改革なるもの、烈士勇婦と稱せらるゝ者の、多くはこれ、社會の輿論に盲從したる結果にあらざるを見る。蓋し社會の輿論を以て吾人倫理の唯一標準とするに至らば、社會の進步は時に遲滯し社會表面上の道德以上に超越すると能はざるに至るとあるべし。果して然らば、社會の輿論なるものは、萬人を律するの規にあらずして、敎育上、多數の民衆の標準として示すべきのみ。換言すれば、そは社會倫理上、一の標準とすべきものなりと雖も、其の性質漠然たるものなれば、良心の制裁に比せば、其の價値極めて低度にある者なり。

夫れ人の一生は、恰も喜悲混合の戯曲の如し。內に確乎たる德操存すれば、苦行難行の現象も、其の光輝を滅するに足らず。

例へ悲劇に終りを告ぐとするも其の徳操の峻節や人生の光榮なり。外美内醜の人、例へ喜劇に終るものありとするも、善に伴はざる外美、悪くんぞ能く、人生の面目たりと稱するを得んや。社會組織の不完全なる時に於ては、時に社會の輿論に反して之と競争し、以て良心の制裁を仰き、悲劇に終らんも、吾人は之に甘んずべきなり。

（九）　内外双美の理想的現象

忌避すべきは外美内醜なり、耐忍すべきは内美外醜なり。前者は小人の住家にして、後者は正義の士の隱れ家なり。而かも後者を以て、未だ俄かに吾人の理想とは爲す可からず。天則に從ひ、人情の向ふ所を結局學的に察すれば内美にして外亦美ならんと欲するは、殆んと自然の預定なるが如し。然り而して我が國民の道德は、外醜内美を尊び之を羨慕するの風あり、武士道の精神亦之れにあるが如し。自今大日本が世界的となり、外人の雜居を許して、人種の競争、國民の競争、愈々益々、激烈ならんとするに當り、吾人が日常、眼頭に映ぜしむ可き者は、内外双美の理想的現象ならざる可からず。内外双美の理想とは社會と個人との調和也。財産の富裕と内心の敬德との双進也。容貌擧動の美麗と性情の善德との双備也。

（十）　國家の外美内醜

如今、日清の大戰争に際して、我が國民の勇氣百倍し來り、敵愾心最も盛なり。げに今回の義戰は十年間の國家教育に勝り、國民の元氣を振作したるもの實に廣大無邊なり。此時に當りて國家の外美内醜を說くの必要殆んとなし。然れども一般の原理を論ずるに際し、抽象的に一言之に及ばざるを得ず。古來の國家歷史を按ずるに、開化の國民は未開の國民に吸收せられ、古びたる國家は新らたなる國家に利用せられたるもの丶如し。埃及、巴比倫、亞剌利亞の滅亡は、希臘の文運隆盛を來し、ピラミッドの塔、空しく昔日の名殘を留め、希臘が羅馬に蹂躙せらる丶や、アゼンスの山、スパルタの原、徒らに昔しを忍ばせ。羅馬の勢ひ、旭日の昇るが如く、望月の滿ちたらん頃ほひや、世界の道路は、羅馬を中心として輻輳したりしが、日耳曼森林の蠻人の鐵拳下に、破却せられたり。而して其の起復盛衰は皆な、國家の内外双美、内美外醜、外美内醜の作用に關係する者なること明かなり。

抑も國家の外美とは何ぞ、曰く物質的現象の裝飾是れなり。文物制度の模倣、死せる法文の繁雜なる、佳麗なる建築の多き、支那現時の陸海軍の如きもの也。國家の内醜とは何ぞ、曰く精神的現象の腐敗是れ也。教育の整頓せざる、士風元氣の振作せざる、宗教道德の衰頽せる者より、風俗の壞亂せる、實學實業の發達せざる、邪說空想の横行するとを包含す。夫れ、國家と社會とは内外双美の時に於て盛大の絕頂に達すべく、内醜外美の時に於て滅亡し、外醜内美の時に於て、恢復する者なり。こは歷々として史上の明證する所也。

我が大日本、自今世界史上に、一異光彩を輝かし、單に東洋の盟主となるのみならず、世界の上に利し、君子國を以て全人類を教導せんとするの一大天職抱負を有す。歐米の社會、宗教道德の習俗は、稍衰頽せんとするに當り、我が國民層一層奮

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

進熱勉して、其の天職を全ふせざるべからず。之を全ふせんと欲せば國民擧りて、私怨私忿を忘却し、一大警醒して、内外双美の大日本たらんとを力めずんばある可からず。

結言　假象と實象、假情と實情

人生道德の進路を妨け、苦痛を生せしむる者は、凡て良心の制裁に反して、爲す可きを爲さゞるより大なるはなし。審美學者云はく社會上に現出する日常の惡事、若しくは貧弱の艱難せる者を見聞して、苦痛を感せざらんと欲せば、之を假象として觀るに加かずと。然り然れども常に之を假象として觀ると共に、内なる憐憫の實情を抑制滅却するに至らんか。習ひ終に性となり、如何なる實象に接遇するも、單に假象として觀るに慣れ、憐憫の實情感をして鈍からしめ、假情とするに至る。人生道德の毒害蓋し之れより甚だしきはなし。

夫れ人生の出來事を劇として之を觀るは、一時の方便にして、其の事件が過度に激烈に感觸を害し、氣色を損するの折に於てのみ用ゆべき方法なり。然らずんば實情と假情と混淆し、實象と假象と錯誤し來りて、人心の秘奥之れが爲めに汚がれ、道德の光輝之れが爲めに消え、良心の制裁之れが爲めに鈍ぶるなり。彼の外美内醜の僞德は、即ち此結果を生する者なり。故奈何となれば、内德を顧みずして、外美をのみ装飾し、外美を以て内德を掩蔽する者なればなり。噫之れ戒むべく又愼む可き者ならずや。

つれ〲草

落花

白衣子

ちる花や　春の女神の　すがたかも。
ひらり〱　まひつゝぞ來る　梢より。
天つちの　たかき情を　うけよとや。
ひらり〱　まひつゝぞ入る　ふところに。
花よはな　汝がゆくゑを　告げよかし。
ひらり〱　蝴蝶となりて　またも梢に。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

乙女

泡鳴子

花の 世界を わがものに、
笑める こゝろの ながれには。
なさけの かげは うつれども。

月の 世界を わがものに、
つゝめる 胸の 深み には、
戀の すがた は やどれども。

うき世 の あらし むら雲 を
わが乙女子 は 身に さけて、
天津御かみ の ふところ に。

かの おさな子 の 玉 を 得て
いだくが 如く、やわらかに、
清き いのち を いだきつゝ。

勇士最後の手紙（下）

兒藍

若松賤子のきみ、上篇を譯して後ち病に臥されければ、こゝに不束ながら、下の篇をつぎて譯したるは　幸子。

ペンの手紙の到着した其同じ夜ミルの停車場へ可愛らしい娘の姿がしよんぼりと見われました。見れば子供の事滊車に乗せてやらふと何心なく役夫が手を出して抱へようとする其の時、自分の持つて居た角燈へうつッたのは涙じみた何とも悲し想なおさながほ、何か仔細がある事と二ッ三ッの問答で遂に此娘はプロサムでリンコン大統領へ兄の命乞ひにワシントン府へ行くのだと云ふ事がわかりました。懐中にしたあのペンの手紙どうして大統領の優しい心を動かさないでをられましようか。翌朝ニウヨークへ着しますと役夫はいそいで娘をワシントンへ立たせました。今は實に一刻千金です。

ブロソムがひつそりと戸をあけて恐る〳〵大統領の前へ立ちました時は、調度リンコンが夜なべに取懸らふと机に向つた其時でした。

ヲヤ、於前は？用があるのか。何だね、と愉快な調子で尋ねました、

アノ、どうぞ、ベンの命を。

と漸く〳〵くどもりました。

ベン？ベンとは誰の事だ。

私の兄さんです、居睡りして鐵炮で…………殺されるのだつて。

ハハア、わかつた、あのベンか、ありやとんでもない失策だつた、この剣呑な時節柄だからね、於前一つ間違て御覽幾千の人が犬死しなければならないか知れやしない、そうじやないか。

エ、おとつさんも、そう云つてゞした、…………でも可愛想にベンは、ほんとうに疲れていたのですもの。ジミが弱つて居たもんで、二人前の仕事をしたんです、をまけにあの晩は、兄さんの當番じやなかつたのだけれど、ジミがあんまりつかれていたもんだから兄さんが自分の事は忘れて、かわりにをきて居てやつたんだもの。

ナ、ナンダツテ、よくわからない、もつとこつちへをいで、マア一躰どう云ふのさ。

と親切な大統領は、此兇しがたき大失策に何か云ひ譯がある事ぞと、よろこんで云ひました。

ブロサムはなほ側近く進みよりますと、大統領は其大きな手を優しく娘の肩にかけ、青ざめた心配想なかほを自分の方へとむけました。何んて丈の高い人だ事此人が此廣い合衆國の大統領なのだと云ふぼんやりとした考がしばしブロサムの胸中にどきつきましたが、それもほんのしばらくの間、ブロサムは言葉少なく、一什始終を話してベンの手紙を渡しました。

リンコンは丁寧によみ下し讀み終つて、あわたゞしく數言の手紙をかいて鈴をならしました。小使が入つて來るや否、大統領が一聲高く、

たつた今是をいそいで、

と命するを、ブロサムは聞きました。

大統領は再び娘に向ひて斯う云ひました、

これから家へお歸り、そうしておとつさんに云つてをくれ、こんな殊勝な息子が殺されるんだつてに一言も上を恨ないお前のおとつさんに、アブラハム、リンコンは、こんな感心な貴い生命を取る事は出來ないッて。い―かい、サァお歸り……………ア、それでもいつその事明日まで待つか、かうも大膽に死を覺悟したベンだ、休暇をやつてもいゝな、そうだ明日までお待ち、そうして二人で一緒にお歸り。

神様があなたをお惠なさるでしよう、

とは、ブロサムの只の答でした。

其後二日目にあのわかい勇士は、妹と一緒にホワイト館へ呼び出されました。大統領は之を自分の居間へ通して、手づからその軍服の肩へ勳章を縫付て、かく申ました。

病める友達のために、疲れし身もいとわず、其荷を背負ひ、なほかわつて夜番をなし、無理ならぬ失策のため死なねばならぬ事となつても、まだ少しも恨みも、きたなびれもせんとは、見上た男だ、勳章はほんとに御前のものだ。

是より二人は、一緒に青山なるわが家へ歸りました。群集は山の如くミルの停車所へ押かけ、此兩人を歡迎いたしました。父ヲーウエンは、我子のかほを見守るのみ、只涙は止めかねて、頰を傳ふて滴ります。かすかに其口よりもれた一言は「エホバの御名は讚むべきかな」。

史傳

熊澤蕃山（其五）

橋本又作

本傳の稿者を從來駒田信夫と署名したりしが、其實同氏の友人橋本又作氏の作なる由、然るに之れ迄同氏が承知しつゝ之を取消さゞりしは、完結の折に正誤せん心組なりしと云ふ、今兩氏よりの申込により、本傳は既載の分、後載の分共に、橋本氏の作にて、駒田氏はその編述上毫も關係なきことを茲に證明正誤す但し此誤は駒田氏が登載上の依頼を受けたるとき原稿に自己の姓名を記したりしを編者は之を筆者と認めたるに基す
社末　某記す

○時政を論じて罪を得

とかくする中に、先に彼を讒せしもの、漸く勢を失ひ、或は禍にかゝるに至り、人皆快しとなせり。然るに蕃山は曰く、小人、惡をなす、其惡は惡むべし、其人を惡むべからず。今天譴にあふ、又憐むべきのみと、度量の濶大知るべし。

寛文（？）九年備藩、學校を岡山中山下に移し、已に落成せり。光政乃ち蕃山を招て、學制を定め、又聖師祭祀の儀を司らしむ。十月開校の式には、蕃山臨て經を講せしに、聽く者堂に滿ちたりき。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

延寶七年、松平信之、封を大和の郡山に遷しければ、蕃山も亦從て同國矢田山に移り寓せり。時に年六十一才なりき。

この里より豐後國中川久淸朝臣のかたへ、木からしの笛をかへし送るとて

音も高く吹き傳へたる木枯しの
むかしにかへるしらべたがふな

中川久淸はまた彼を尊信すると厚く、嘗て十里外に迎へて、待遇を盡したりき。

蕃山、矢田山に移りたる歳、母衣箙を大和三輪の社に納めて、世事に意なきを表したりき。

之より先光政公、已に位を去り、長子嗣く、蕃山の長子繼明（蕃山右七郎）曹源公に仕へ、忠節を致したりけるが、貞享二年沒しければ、蕃山、後事を慮り、君に上書して藩政の得失を陳し、小人を付け、君子を親み、百姓を憐み、士氣を振ふべき事を論せり。公之を嘉納したりき。

貞享四年丁卯、六十九才の時に、五代將軍綱吉、また其經濟に長し、才學の譽あるを聞て、將に召し見んとし、松平信之の子、忠之をして之を下總古河に招かしむ。因て又古河に移れり。之より先、堀田大老（備中守正俊）に召されて大に時政の上に談議する所ありしが、其後堀田氏變にあひて卒せしにより、其事行はるゝに至らざりき。是に至りて其十月、又持論を述べて將軍に捧けしに、大に旨に忤ひ、忽ち古河城外廓に禁錮せられ、其封事を取次たる門人、大目付田中孫十郞友明、及び同役河野權左エ門は共に職を免せられけり。其封事今傳はらず。大學或問といふ書は、即ち之なるべしといふ說は非なるが如し、該書は上書の躰にあらず。

或はいふ門人、蕃山の著書を謄寫して世に傳ふるものあり。中に答幕府執政官田中孫十郞問條といふありて、時政に涉りたる事ありたるにより、執政牧野貞成、處士が妄に政を議するは其罪大なりとして、乃ち禁錮したるなりと。

蕃山の世に謗らるゝとは、今に始まれるにあらず。早く既に異學派、猜忌批難を受け、特に當時有力なる林道春、山崎闇齋等の攻擊を受けたり。獨り朱學者のみならず、王學の者にも、佛者にも、大に嫌惡排擊せられしが、幕府はまた由井正雪の亂以來、處士をば大に忌諱せし折とて、蕃山の上書といひ、世評といひ、頗る嫌疑すべき所あるを以て、此處斷に及びしなり。

○錮中の境遇

已に幽囚の身となると雖も、泰然琴書を友として、困阨の中に星霜を送りけり。人其幽鬱を慰むるものあれば、答て曰く、これ天、我に幸せるなり、古人いはずや、配所の月罪なくして見んとあらまほしと。もし我、實に罪過の覺ありたらんには、心は困阨の地なるべし。然るに今予、罪名を蒙るとも、心は廣明正大、俯仰天地に恥るとなし、靜夜の月は世にある人の見かたき處なり、配所なればこそ浮世の外の月も見るなれ。天實に我を寵するなりと。之より又政事を口にせず、人の政事を問ふあれば、たゞ默して傍なる笙を吹くのみ。

戊辰の春配所にて歸雁を見てよめる

老の身の見んことかたき故さとに
春まち得てや歸るかりかね

たとへ蘇武にならへるかりかれに王章を傳ふる事なりとも人の知らざるが爲に公の命を背くべからずとて

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ゆく雁に關はなくともおほやけの
　　いましめあればふみもつたへじ

元祿のはしめつかたものすさまじき木枯の頃配所いと淋しくおはしまさんと思ひて舊友のかたより二首の文を書付て雁のつばさに傳へけれど返しもつたへかたしと口すさみける

木からしにおとつる紅葉くちぬとも
　　つきせぬ春に花や咲かまし

小夜嵐よもの落葉はうつむとも
　　わけゆく道は知る人ぞしる

禁錮の命ありし時に、妻を携ふる事を許され、錮中互に愛情を慰めけるが、妻は元祿元年八月歿しぬ。妻は矢部氏、よく貞操を守り、夫の薫陶により賢良なりけるが、病氣篤なるに及て蕃山其枕上にありて、心靜に終るべしといひければ、答て曰く、常に敎訓したまへる處を服膺しぬれば、心を勞したまふと勿れ、たゞ先んして死する事、遺憾とする所なりと。蕃山曰く、人生は朝露の如し、何ぞ先後あらんと。夫人諾して曰く、妾過ちぬと、即ち瞑しぬ。蕃山よく終れりと、いひて之を弔せり。門人其葬式を問へは、傍なる琵琶の筺を出して、之を柩とすべしと命じぬ。即ち其言の如くなせしとぞ。」晩年專ら心を易の注解に注きけるが、其書未た全く成らざるに、元祿四年辛未七十三才にて病にかゝり、其八月十七日、古河城中賴政廓に歿しぬ。公卿諸侯之を聞て、皆哀惜したりしが、特に松平忠之は慟哭して之を弔し、門人親戚を會して、大堤寺村鮭延寺に厚く埋葬せり。會葬門人には中根次常、巨勢直幹、北小路石見、松平隱山、山本廣定及び從者野田勘左衞門等なりき。墓表題して『熊澤息遊軒伯繼之墓』とし、夫人の墓表『息遊軒妻矢部氏之墓』と相並てたてり。高さ各三尺方一尺弱。その訃、備前に達するや、丹波守輝祿大に之を悼み、神主を其家廟に安したりしが後、祠堂を蕃山村に建て、寶永中之を網濱村別業に移して、春秋の祭祀をたゝざりしとなん。曽蕃山、四男八女あり、長男は右七郎繼明、蕃山氏を稱し、松平源公に仕へ小姓頭たり、次男左七郎は、野尻氏を稱し、松平信之に仕へ、三男武三郎は熊澤氏を襲ひて、本多下野守に仕へ、四男左四郎は日向侯に仕へき。長女及び次女は、池田政倫の妹として、長女は宮野某に、次女は池田内膳に妻はせけり。次弟泉仲愛（八郎右衞門）も池田光政に事へて、德行の譽ありき。次弟野尻一成は、中川山城守の臣となりき。

蕃山の後裔の事に付て湯淺常山（元禎）の記中にいへり

延享五年戊辰三月十九日敦龍に謁せんが爲未明に岡山の都城を發す（中畧）晩により新邑に宿す、主人は則ち孫平、熊澤大人伯繼の孫なりわれは舊識にあらず使を走らせて宿せんとを請ふ、孫平年六十六門外に出て招て入れたり、茅屋なり、男女一人孫四人あり、伯父など四五人もあるへし、和氣海道のかたは荒物の見せを出し茅屋に孫平あり、其工夫をなしたる有樣熊澤大人の血泳悪べからず、裡に大なる酒藏あり富有たぐひ稀なる人なり即置酒してまめやかに止めたり是右七郎の後か。

附言世人往々蕃山の血泳斷絕せるものゝ如く思へり、予先日備前の先輩貴族院議員小原重哉氏に謁し談蕃山先生の事に及ぶ氏は最も蕃山の傳に詳し、當時氏曰へらく蕃山の系家現に岡山に在り池田茂草（？）舊丹波守として貴族の籍にありと、蕃山の遺績官之を追賞して明治十五年山林大會に金章を贈れり茂草之を受くと。然るに亦聞く所によれば舊幾坂藩主（丹波守）子爵池田政禮君其后系なりと云へり。

《訂正》

本誌第三百九十五號へ登載せる本傳蕃山の致仕につき蕃山自身に辭任せしが如く記せしが今舊備前藩の長老小原重哉氏（氏は現貴族院議員にして博學多識の譽高く最も蕃山傳に詳通せらる）より承るに蕃山の致仕は蕃山自らなせるにあらずして彼は實に國法を犯せし（江戸在勤中叨に元服を加へ岡山に歸り海西の戰に從軍せんとせし）と云ふより藩主芳烈公（新太郎光政少將）の恩寵厚きにも拘はらず邦國法にかゝるを以て之を蟄罰し退隱を命じ玉ふ蕃山即ち江州桐原に謫居すこの蟄罰は以て烈公の寵罰を明かになし玉ふ英主たりしを知るに足る、傳へて古今の美談なりとぞ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

家政

戸内、時の警しめ

山下石翁

◎寢起につきては　申すも恐こけれど、大元帥纛下が、廣島の大本營にて起居被遊事を承わり、謹しみて戒しめとすべし。朝たには、日輪未だ上らざる四時の比より御褥を出させ玉ひ、夜は星の眼こも重げなる十二時の比ろ尙ほ軍事に御心を休ませ玉はぬ御事もありとかや。夫れ、家庭日々の整理は、先づ寢起の時刻より生ず。主婦たるもの今に於て戒心し、嚴そかに規律の勵行をなすべし。

◎飮食につきては　遠征の將士が難儀のほどを想ふべし。平壤の戰かひにも、大島少將の一手は食わざること數日、餓死せんよりは戰死すべしとて奮進したり。太孤山沖の役、西京丸は糧食など入るものかと呼わつて進航したり。飮物不潔にして、淸水は甘露よりも尊とし、田の水を飮むとすらあり。食物不自由にして、道明寺ほしひを珍味とするとありとぞ。此等の難儀を念ふに於ては、飮食の献立も自づと一變すべきか。

◎衞生を重んずるは　左ることながら、僅かの不加減に大層の人手をかけ、些細の病氣に幾多の迷惑を及ぼすは、此際尤とも愼しむべきことなり。此の度の戰かひや、打死するものよりは、病にかゝるもの多し。彼等は、十分の看護を受くること能わず、獨り甚だしく難みて、治療の時に後るゝもの多かるべし。異境の天に名も知れぬ重病にかゝり、同胞の看護も自由ならずして、音信を家鄕に寄せん便利もなき折は、何如に心ぼそきか。之と違ひて、一家同族の央ばにあるものは、假令ひ重き病ひに罹るとも尙心づよし。況してや些少の不加減をや。須からく氣儘を制して、ぢつと辛棒すべし。病ひは、多く氣より來り、亦、氣によりて制せらる。此際病ひを養なふの方、氣を以て勝つべし。然し乍ら

◎看護するものは　當に反對の覺悟を有すべし。其身不幸にして戰塲に出る能わず、陛下の士卒が負傷を看護することも出來ざるなれば、切めては家内近隣にありて病むものゝ爲めに信切に看護し、速やかに全快せしめて國家の用に働らかすことをば望みとすべし。

◎戰場に在て士卒に號令するは　下士官、士官、最先に進みて身を以て指揮するなり。吶喊の節などは、士官刀を揮つて先登するなり。左れば、激戰には、士官の打死するもの多し。此度びの戰を見ても知らるべきか。凡そ、人を號令して眞とに奮進せしめんには、號令者先づ身を以て進まざる可らず。主婦が、下男下女を指揮するにも、此の法と違ふべきものあらんや。

◎漢の高祖蕭何の功を第一とし　戰争には、兵粮方の器量を特の外に大切とするものなり。此度び、兵站部と云ふもの出來て、此の後方仕送りの役を勤むるに、其のかくれたる勳功、追々世に知らるゝを見ずや。或人、此心をよみて、汐干狩の下駄番と言ひぬ。一見すれば、眞とに詮なき役ながら、此の番人あればこそ安心して貝蛤をも拾ふことなれ。戰かひに、兵站部が必要なるとの知らるゝは、内君が外に働らく良人の大助力者たるとの知らるゝ也。内顧の憂ひなからしむるのみか、後方仕送りの大役をつとめて、花々しく外に戰かわしむるは、優れたる主婦の勵ほしなるべし。

◎いざ戰かひと云ふ今日こそ　平生の覺悟の知らるゝときなれ。今日の覺悟の足ざりしとを知らば、則はち今日直ちに仕度すべし、明日も亦た新たなる戰かひあらんや知る可らざれば也。凡そ、覺悟の用は、百日にして一日實地にあらわるゝなり、左れど、此の一日が百日のうちの何の日たるかを察しがたきによりて、則はち百日つねに仕度せざるを得ざる也。人生の戰かひに臨むものは、常に寸刻も此の用意を廢すべからず。或人は、預備役にあるが故に、如何に貧困しても、召集の日、參着すべき地に到るの旅費は、膚につけて離すとなし。これぞ武らひの覺悟ならめ。主婦も亦た此の心得あるべし。現在は、戰地に行きたる人の家族の爲めに色々の世話もあれど、之を當にして人々の慈悲に生計するは恥かしからずや。今ま、出戰せし人の遺族に鑑がみて、今より萬一の用意を爲すべし。良人、たとひ軍人ならずとも、出でゝ何事かに戰かわざる可らざることは、大丈夫の身の上に不斷たゆるとなければ也。

小事なりとて之を怠るは、これ其人にとりて小事にあらず。眞にこれ大事にてありし也。彼は、即はち大事を怠たりし也。　ブーセー

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

開書

廢娼論につきて

（前畧）

娼妓は元來廢さずんばある可らず、此れ實に貴下の議論に双手をあげて贊成する所なり、貴下之に盡力せらるゝと久しくして尙ほ功を奏せず、僅かに群馬地方に其の一端を成就せし如くなるのみは遺憾と云ふべし。此の玉論にして捲風の勢なきか、日本の道德も亦思ふべし。

廢娼によりて、よし密賣淫殖えたりとするも、政府は公けに此の醜物を許可し置べきにあらず。人民が私しに竊かに犯す所ろの罪は據なきとにて、追々に矯正すべし、政府なるものが堂々公許するに至ては、此上なき恥辱なり。

廢娼實行の一着手として茲に拙策を案す。即はち、妓樓に於て飮食するとを嚴禁するとこれ也。生はもと日本に於る職工たり、此地に來りても亦た職工たれば、暗處の事情も詳らかに承知せり。惟ふにもし此の一事を斷行せば、廢娼にひとしき良結果を速やかに納め得べし。

妓樓に於て飮食を許すの弊害は、

一 妓樓より警官の厄介を蒙むるは皆な飮食の事よりす
二 登樓後二三日も職工等が其職業を休むは皆な飮食の過度より來る
三 飮食を許さるゝゆへに數日間も妓樓に留連する也
四 飮食あるが爲めに過分の散財を爲す

左ればもし飮食を妓樓に嚴禁せば、今の弊害の過半は消失すべく、自から妓樓も衰滅せしむるとを得べきか。拙策ながら書して貴下の參案に供す。

米國サンフランシスコにて　城常三郎

寄書

御國の歌 (OUR IMPERIAL SONG)

音數初句五。七五、四句二段。全四節

明治卄七年九月三日稿

中村與

第一　萬世一系の帝を戴く

朝日出る
東の方に立てし國。
三千餘年のそのむかし、
皇祖神武の時よりも、
天つ日嗣は變らじな。

三種の神器代々に
傳へまします、今日までも。
猶も八千代に傳ふなる、
君が御代こそ目出度けれ。

第二　我等の祖先は皆一なり

いやしげる
我國民は一つたれ、
末は木の葉と別るとも、
根元たゞせば皆一つ、
諾册二尊に出でしぞよ。

神の末なる我々は、
あだし種をば交へずよ。
他し人々來るとも、
皆我民よ、同胞よ、

第三　日本魂の顯るところ

春は花
花中の王は櫻ぞよ。
咲いて萬朶の雪となり、
ちりてはもとの根に歸る、
日本魂は櫻ぞよ。

白地に日の丸、我國旗。
門邊や世界にひらつきて、
光りを放つ我旗は、
日本魂のしるしぞよ、

第四　島人根性

踏み出せよ、
海も我國我家ぞ。
我等の祖先を思へかし、
戰爭しては勝つばかり。
負す魂は我根性。

十萬餘人も何のその、
生きて歸るは只三人。
國の榮を顯せよ。
世界の日本を打立てよ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時報

◎表誠、美談

●婦人共立育兒會　は貴婦人の設立に係り貧民の病兒を救療するを目的とせる一の慈善會なるが日清戰起りて遠征軍隊勞苦の狀內國に傳はるや同會頭鍋島侯爵夫人は去る廿六日其邸に幹事一同を招集し種々協議の末從軍者の小兒にして疾病に罹るものに對し之を救療せんとて更に從來よりも病床を增加したりと云ふ

○婦人の義擧　宮城縣遠田郡涌谷町亘理類子を始め數名發起人となりて恤兵義捐の募集に盡力せしに同町にて直に二百餘圓の金額を得たれば之を第一回義捐として恤兵部に獻納し續て第二回募集に着手するよし同婦人は藤州公の後胤にて平生奉公の志篤き人なりと云ふ

●大分町婦人の義擧　同町の婦人某々等は今回曠古の盛擧たる御親征に付きては三千年來皇恩萬分の一を酬ひん爲め自ら發起となり左の規則に依り恤兵部獻品を本郡內に募集することに着手せりと

恤兵部献金募集規則

一本部を大分町美濃屋に置く、一梅干一舛以上、一味噌漬一貫目以上、一物品代金二十錢以上、一物品徵集は來十月二十日を限り大分町本部に取り纏め候事

●婦人諸子の義擧　土佐婦人愛友會婦人智德會及び婦人實業會中村の三會一所婦人諸氏の發企にて唱歌軍歌の演奏會並に幻燈大會を開き其の揚金を以て恤兵救族の費用に宛んと目下其の準備中

●髮を斷て夫を勵す　京橋區水谷町の宮川萬吉(三十三)子供三人と女房を殘して召集に應ず女房とき(二十八)鬒髮を斷ち誓て曰く妾夏人のために節を守りて遺子を養ふべし良人安ドて國家に盡せよと

●武家婦人の双璧　此程岡山なる日本赤十字社看護婦の廣島に赴けるを岡山縣書記官坂本彭之助氏之を引連れ廣島驛に下車せしに其中なる山本鶴子(三十一年)といふは平壤に戰死せし山本大尉の妹にて母堂の驛に出迎ひ在りしに面を見合せ互に凜然として些の愁容を見はさず母堂は書記官に向ひ此度は妾の悴もお役に立ちましてとのみ言ひて跡は言葉もなかりしに人皆淚を湛へたりしとぞ、又同役戰死の神田中尉の未亡人は未だ二十に滿たざる身なるに其變報を聞きて夫が御國の敵を斃して戰死せしは武士の常なれば豫て覺悟の上なりとて一滴の淚をも人には見せざりしとなん何れも健氣の心にこそ

●大尉の夫人、夫の退職を憂へて自殺す　京橋區釆女町三十三番地金子おとや方寄留退職陸軍大尉前島雄壞妻おぎん(三十五年)と云は豫て病氣に罹り爲す事もなく日を送る內一昨夜九時頃居間なる布蒲の上に坐しつゝ剃刀を以て咽喉二ヶ所まで切りしが死に至らずしてうめき苦しむ物音を夫雄壞及びおとや等聞附け直に治療介抱に手を盡せしかば一命に係る程の事はあるまじといふが此おぎんは一体男勝りの性質なれば良人雄壞が退職の爲め從軍の榮を得る能はず故舊の同僚が牙山平壤に於ての手柄功名を聞くに附け何となく羨しき女の愚痴より病氣中精神一層錯亂して斯る始末に及びしものなりといふ、一婦人猶此氣慨あり以て國民の意響を見るべし(讀賣)

●故神田中尉の未亡人　平壤の役に戰死せし豐橋衞戍步兵中尉神田音熊氏の未亡人は其年齡未だ二十に滿たざる由なるが夫の戰死を聞きし時も一滴の淚だも出さず大方敵の五人六人は討取つた上死にましたろうと物語られたりと武人の妻君は格別の者なりと褒めぬ者はなしと

◎片々

●支那服裝の日本人　本月初旬新嘉坡より橫濱に來航したる某船に支那服を着したる日本婦人あり同人の日本人を見て恐れ惶く色の尋常ならぬに乘合せし日本武官某氏試みに其婦人に就き汝は支那人にや將た日本人にやと問へば彼れ漸く口を開き日本語にていひけるは妾は日本の東京のものにて四五年前橫濱在留の支那人某方の子守に雇はれ果ては三ヶ年五十圓の給料にて其支那人に伴はれ支那廣東の某地に居り年期漸く明きて今度歸國することはなりしものゝ何分日本衣類の持合せなきより止むを得ず支那服を着け居るにて決して〳〵支那の女ならず扨て日本と支那との戰は新嘉坡にて始めて知り返へす〳〵日本衣類の所持なきを後悔し支那婦人と見誤らるゝが殘念さに乘船以來斯くの通り一隅に縮み居るなりと答へしよし

○上毛の密娼　八月末に取調べたる所によれば藝妓を除き酌婦のみにて左の如しと

五百六十七人　內 三百九十四人 密娼被疑者
　　　　　　　　 百七十三人 然らざる者

又前橋市のみにては左の如し

七十六人　內 五十二人 密娼被疑者
　　　　　　 二十四人 然らざる者

女。大體などでゃないに、十錢や十五錢儲けたって、飲んでしまへば、かすほども殘らぬ。

女。おまいさんたちは、まァ、ひとりもんじゃといへば、それでもすもが、わたしたちはつま子のある身、毎日〳〵かうして働らくのも、何にかなうちの助けにせねゃならぬ。

男。おかみさん、あぢなといふぜ。おまいも毎晩、さし向ひで飲むときは、「これ、こちの人」なぞいふのでゃないか？

女。なか〳〵そんなどころでゃ御坐んせぬ。子どもが病氣で、お醫者にかゝればおあしが入る。おあしが入るにも、このごろの不景氣では、うちの人も澤山取れぬ。それで、わたしはこんなこともするのじゃわいなァ。

男。それは感心〳〵。とても、わしらの出來ることでゃない、もとよりをんなではないからな。―それはさうと、このお宅へ、このごろ、病人のお客が來て居るさうじゃが、一向醫者のやうな人も見えぬなァ？

女。さうです、なぜだか？こんなお家にこそ、おかねは湧くといふもの、ひとりやふたりのお客ぐらゐ、わたしらの身分でいへば、米つぶ一とつに足らぬ道理。どんなにかゝるうても病氣のお客を、どうしたわけやら？まァ、そのむすめさんがお氣の毒。

男。なァに、ためよ。いくらかね持ちといはれるやうになりあがっても、もとが紙くづ買ひの旦那さん。いまでは、あきうどのおや玉だが、矢張り根性が、ぐづ〳〵して居る。それでなければァ、こっちにもさっぱりと、十錢や十五錢で無く、いちどきに一圓も二圓もくれるがいゝ。あまりけち〳〵すると、げぢ〳〵虫になってしまはァ。

女。あんまりわるくち敲たくと、聽こえますぞえ。さァ、あちらへ行きませう。

男。さうだ〳〵。早やくやすまうか？

〔兩人横手へは入る。向ふより桂吾眞、さっぱりした書生風、ステツキ。〕

桂。この遠きみちをわざ〳〵尋づねて來て、おとゝひも逢はれず、きのふもまたおなじこと。どうしたとか知らんが、あの健康だッたからだで、不意にひどいわづらひ。若しや墓ではなしたことをわるく聽いて取ッた爲め、あのやさしいむねが急におどろいたのであるまいか？それなら、いくえにもわびもする。どうぞ、けふは、逢ふて見たいものだなァ。

〔舞臺に來たり、玄關の呼びりんを引く。奥より、女中お鍋。〕

お鍋。何に御用で御坐ります。

桂。雪子さんはお宅ですか？

お鍋。はい、いらッしゃいます。あなたどなたさまで？

桂。桂といってくだされば、わかります。

お鍋。えゝ、あなたが桂さん？―あの、それでは、―いえ、いま、いまの先きお孃さまは、―あの、おあいにくですねェ、お出かけなさりました。

桂。はゝァ、お留守ですか、いつもわるいところへ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

お鍋。ほゝゝ、お氣の毒ですねェ、まァ、おあいにくに。

桂。それでは、お留守でも、ちョッと上田さんにお目にかゝりたいのですが。

お鍋。あのおかたですか？あのおかたは御病氣で、お醫者が誰れにもあはれん、逢ふといけないと申して、どなたさまもおことはり申しますので。

桂。その病氣なのは知ッて居りますが、さほどひどくッては、仕かた御坐いません。それでは、はゞかりですが、どうぞ、雪子さんがお歸いりなさッたら、上田さんの御病狀をお手がみでくださるやうに。

お鍋。なに、そんなに御心配なさるほどでも御坐りません。―もう、お歸へりですか？

桂。これは失禮。

お鍋。左樣なら。

〔桂は花道へかゝッて、おも入れ。〕

お鍋。あんななりで、まァよくこゝへ來られたもんだ。こゝなお孃さんが、來たら、醫者が人にあはれんといッたと、ほどよくことはッてくれといッたは、尤ものよ。―あばよ！〔はいる。〕

桂。いまのものゝこと葉といひ、雪子がまた留守。さほどひどい病氣なら、あの親たしい雪子が、看護もせずに出て行く筈は無いが、―はて、合點が行かぬ。

〔向より宮城軍醫、官服のまゝ。花道にて、桂と行きちがうて、ちき舞臺。玄關のりんを引く、奥より男。〕

宮城。主人は居ますか？

男。はい、お通りなさりませ。

〔兩人入る。桂いかりのこなし、また舞台へかけ來たる。本釣鐘。〕

桂。さては、涙子！そんなだなァ！宮城如き非人めにだまされたか、あさましい。われはひろきこの世界、あかす友も無くなッた。天邊かけッて鳴く鳥の、吐き出すねはこのむね、つゝみがたき血のたま。これァわがこひは〔木の頭〕絶ちきッたぞ。

〔幕。ちき、引ッ返へす。〕

○返へし。

(一)森子爵屋敷の塲。

〔本舞臺すべて定行坐敷、定行瀧子相談の躰にて、幕開く。〕

瀧子。いま申しあげます通り、おやに取りては、むすめを持つほど苦勞御坐りませぬ。

定行。それはさうさ。こッちだッて、こゝろはちがッて居ない。

瀧子。さうおッしヤッても、世に澤山ためしが御坐んすものを。おやがときといふものうしなはし、わが子の行すゑをくるはすのが、まァ、何によりのかわいさうで。ほどよいあひてが御坐りますなら、早やくそはせたいのがおやの念。

定行。それヤァきまり切ッたとさ。おれだッて、ゆるさんで

も無いが、見ろ、まァ、桂を。あの考がへが氣にくはん。

瀧子。それはさうでも御坐んせうが、あの子も早や十七で、ものゝあはれ知りそめ、若し吾員さんでなければ、誰れにしてもいやだといひ張りますも尤も。いひ名づけといふまでも、かたき討ちがいまどき出來やう筈は無いもの。たとへ吾員さんの氣ではどうおもふて居るか知れませんが、上田とかいふむすめはたゞ友だちであッたを、もう、尋づねに行くこともよしたとのこと。

定行。それャァ何んでもいゝ、ほッとけ。仕かたが無い桂だ。かたきの手でぐづ〳〵こき使はれ、もうよい加減といふとこで、免職されたざま見ろ。をひとおもッて世話してやッた、甲斐はどこ行ッた。洋行までして、ぐづ氣ちがひですむのかいつまで、人の厄介になるつもりだ、ばからしい！あれだから、定行は民子をそはせないんだ。

瀧子。すれャ尤もで御座んせうが、桂としたむねには、またやさしいところを民子は見て居ります。どうぞ、いち概にいはぬやう賴みあげますわいなァ。

定行。うゝ、桂さへよくなれば、いつでもゆるす。

瀧子。そんなら、いち度、吾員さんのこゝろを聽いて見ます る。――それにしても、あの子は、矢張りこひの爲めゆゑ、お墓へまゐりましたが、も早や歸いりさうなもの。――あゝ、おとがする。――誰れ？民子かえ？

民。〔奥にて〕わたしです。〔侍女お松と共にいで來たる。〕

兩人。たゞいま。

瀧子。くたびれはしないかえ？

民子。いゝえ、却いッて氣ばらし。

お松。いつも、まァ、お嬢さまのおかげて、わたしまでがなぐさみになりまして。

瀧子。うちでふさいでるより、いゝだらう。

民子。おかし、おッかさん、誘善さんのおはなしでは、吾員さんがあの日に、たふりづれでお詣りあそばしたと。

お松。をなごのおかたと御一所に。

瀧子。そんなら、上田であッたらう。

定行。そんなとするから、免職になるんだ。

瀧子。それでも、あれはまた宮城のさせたのにきまッて居ります。

定行。それは別なはなしだ。

民子。あゝ、もう、わたしャ宮城の名をさへ聽けばかなしうなります。今も、わたしャお墓でひとり泣いて來ましたの。

瀧子。それも誰れの爲めだか？

民子。あら、おッかさん！〔母の膝にあたる。〕

瀧子。なに、いゝよ、おや子の仲だものを。

民子。だッて、まだわからないでせう？

お松。お嬢さまはこのごろ、ほんに、まァ、吾員さまがおいであそばしてから、お氣がうき〳〵なさりまして。

民子。おまいまでがそんなことを！

お松。いゝえ、ほゝゝ！

瀧子。わたしもおとッさんに賴んでたのさ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

民子。それでも、また、これには吾良さまのおむねも……
瀧子。それサア、知らねばならんよ。おまい、吾良さん呼んで
おいで、けふは、ゆっくりはなして見るから。
民子。いらっしゃるか知ら？
瀧子。あゝ、居るよ。
民子。そんなら。〔立ッ行く。〕
瀧子。すぐとおいよ。—お松は、まァ、着物でも。
お松。はい、着かへますから、御免くださりませ。〔兩人は入る。〕
瀧子。わが子ほどかわいゝもの、どこにも御坐りませぬ。
定行。こっちだっておなじとさ、そはせたいはむね一杯。だが、
桂の了見次第。
瀧子。いかにおや御のゆゐ言とは申して、民子が、まァ、どう
してひとり、あと取りの吾良さまを措いて、桂家をつい
で居られませう？どうともして、ふたりが仲むつまじう、
夫婦にさせたいばかり。
定行。それでサァ、みんなおまいに委かす。
瀧子。ありがたう御坐ります。そんなら、けふは、ほどよう
すゝめて見るで御坐りませう。
定行。まかし、おれが居っては、却って邪魔。〔立つ〕瀧子、そ
んなら、あとはまかしたぞ。
瀧子。よろしう御坐ります。〔定行は入る。〕
あゝ、吾良さんのこゝろ、しかとわかればよいに。いま
に世話かけながら、よもやすげ無ういはれまい？しても、
苦勞なとじゃなァ。〔民子もさる。〕

民子。おっかさん、ちきいらっしゃるよ。
瀧子。さうかい？
民子。わたしゃどうしやう？
瀧子。そこにおいでよ。
民子。それでも、……
瀧子。恥づかしくはないから。
民子。それでも、なんだか……
瀧子。いゝよ、何んでも無いやうして居れば。
〔奥より桂。〕
桂。ほとゝぎす、
こゑや　こほり　の
血　一魂
ほとゝぎす、
こゑや　こほり　の
血　一魂
民子。あなた、何にかいゝ句をあそばして？
桂。はゝァ、なァに？
ほとゝぎす、
こゑや　こほり　の
血　一魂
瀧子。まァ、おすはり。
桂。これサ、どっこい　〔あぐらかく。〕
民子。こゑが血の一魂とは、まァ、何にでせう？
桂。はゝァ！戀を絶ち切って吐き出したら、なま血のたまし

ましひばかり。
瀧子。何にをおしなさってたの？
民子。あなたは、まァ、勉强家ですねェ？
桂。いや、なに。人が書物讀むのは、あたりまへのことです。
民子。それでも、あなた？
桂。何んです？
民子。あまりおそばすと、あたまがわるくなりますよ。
桂。なっても、いゝでやァないかね？
民子。ほゝゝ、そんなにおッしゃったら。
桂。なに、をばさん、あまり民子さんをやすませてはいけませんよ、なまけてしまう。大淨寺へばかり行ッたッて、まさか、お墓が學校でやァあるまいし。
民子。あら、あんなことを！
瀧子。それでも、あなたのおとッさんのこと心配ばかりしますから、氣がふさいでゝ。—しかし、あなたいッて、まァ、もうすこしいへのこともおもはんと。—いまも、この子は詣ッて來ました。
民子。あ、おッかさん！いゝもの忘れて居た、おみやげがあッたのだに。
瀧子。さうかい、何んだえ？
民子。お菓子よ。
瀧子。丁度いゝ、持ッておいで。
民子。それでも、すこしだもの。
瀧子。すこしだッて、耻づかしいことは無いよ。持ッておいで。

桂。ありッたけでいゝからね。
民子。ほゝ、そんなら。—だッて、こゝろばかりですよ。〔はいる。〕
瀧子。あなたももういゝとし、いつまでもひとりでは居られまい。どうせ、いち度は、およめは取るでせうに。
桂。いや、もう、わたしは一生涯、決してつまは持ちません。
瀧子。それさ、まァ、急にどうしたわけで？
桂。何にも、急でも何んでも無い。
瀧子。どうして、おまい、まァ、そんな氣におなりなさッたよく、まァ、考がへて御覧、桂のいへを繼ぐもの、あなたの外誰れがおらう？民子があと取ッて居ましても、あれはおなご、あなたのお時が來るを待ッて居ました。それに、あなた、むざ〳〵、家はどうするおつもり？
桂。おやは家をつげとはいはなかッた。
瀧子。そんなら、おまい、かたきを討ちましたか？
桂。さァ、それは……
瀧子。討ちましたか？
桂。さてそれは……
瀧子。討たないでせう？
桂。それは……
瀧子。さァ？　桂。さァ……
瀧子。さァ？おほゝ！あなた、何にも、それにはおよばないでせう、家さいお繼ぎなされば？
〔民子茶と菓子を以ッてくる。〕
以ッて來たの？

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

民子。まア、お茶でも。〔茶を入れなどする。〕わたしは、いま、お墓から歸つて。
瀧子。この子はいつ詣たつて、草も取らないのだもの。
民子。あら、取りますよ！わたしだつて、取らないで？――しかし、あなた、まア、大層、お墓が奇麗になつて居ましたよ。
桂。さうでせう、こないだ、わたしも詣つたから。
民子。横手の草が取れて、なか〳〵さつぱりいたしました。
桂。はい〳〵！
瀧子。おとつさんもあのお墓で、御心配あそばして御坐るだらうに。――吾良さん、あなた、おあとは繼がねばなりませぬぞ、たゞひとりのあと取り。
桂。はい〳〵！死んだあと繼げやア、お墓のしつぽだ。
瀧子。吾良さん！それでは、おまい、通りません。家を絶つは、先祖に對しても不孝です。
桂。いや、をばさん、わたしは決してをんなは持ちません。
瀧子。そんなら、大淨寺へお行き。
桂。それや、ぼこ〳〵〳〵〳〵。
民子。あなた、それや、まア、何にをあそばす？
桂。これは殺ろしたこひのおとぎさ。
民子。ほい〳〵、こひにからだが御坐りますか？
桂。〔おも入れ〕無いに死んだが、なほかなしい。
瀧子。まア、おまい、なぜそんな氣になつたゞらう？そんなら、いよ〳〵家はつがないつもりだね？
桂。をばさん、わたしや氣ちがひだ、ほつときなさい。
民子。そんなことを。あなた、なぜ、まア、御自分でそんなことおつしやります？
桂。いや、民子さん、これからも、桂のいへは矢張りあなたのものですから。
瀧子。それでも、この子ひとり捨てゝ置くおつもりか？うちのをぢさんだつてもね、あまり御心配あそばし、腹をたてゝ御坐る。
桂。それやア、これまで受けました御恩にそむくわけでは御坐いませんが、どうしても、仰せには從がへません。――ちゝうへも、わたしに家をつげとはいひませなんだ。
瀧子。そんならさ、かたきを討ちますか？
桂。さア、それは……
瀧子。討ちますか？
桂。さア、それは……
瀧子。「さア、それは」でやア、わからないだらう？
桂。それは、實は、むねに一とつ、學問したものでなければ知れないとがあるんです。――これや、どつこい！
〔立つ。奧より、定行いかつていで來たる。〕
定行。これや、桂、ぐづつきめ！樣子は聽いたぞ、氣ちがひ！かたき討たねやア、そのかはり、おやのあとはつぐ筈、これが、貴さま、わからんか？わからねやア、でゝ行け！――これや、をぢの恩さへわすれて、そんな木石同然なら、こゝには置かん、出て行け！出て行け！
〔桂をつき飛ばす。〕

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●評論第二十一號目次　一月二十日發兌

棟梁の德
吉田松陰を讀む
勇退高踏の辨
近頃官吏となりし人
佳人と愛國者○人をして感動せしむ
岐阜縣治水策(上の一)　齋藤音作
强者の權利の競爭を讀む(承前)　布川靜淵
大日本協會に寄す　馬場勝彌
新教育法　末摘花
上毛廢娼史

●評論第二十二號目次　二月二十日發兌

方今師人先生の歎
禍福ともに存す○新大臣新次官○姿を蓄ふるの國士○板垣退助君の大時機○近衞公及福澤先生○本願寺の姿及び私生兒○西鄕菊次郎君○人心の倦む所以○改革は大掃除に似たり○前田正名君
樹かけのおもひ　稚翁
同じくば　人の妻
道德法律の進歩を讀む　布川靜淵
岐阜縣治水策(上の二)　齋藤音作
非孤立道義論　坂下龜太郎
折にふれたる　紫苑
英國果して海上權を失はんとするか○晉國近代の音樂

●評論第二十三號目次　三月廿五日發兌

宗教上の東方問題
鐵血翁と老西鄕
頭德條約改正論
感激獻身
客氣、義俠、平凡大王
聯立內閣未可成論
大勢一觀
社會學史上スペンサーの地位　布川靜淵
岐阜縣治水策(中の一)　齋藤音作
破れ家のつゞくり話を讀む　玉堂
深見笠を讀む　盤松子
文學斷片を讀む　撫象子
濠州クインスランド　山下好民
內大臣德大寺卿を懷ふ　王臣某
花を待つのおもひ　稚翁
伊太利の現狀　末摘花

●評論第二十四號目次　五月五日發兌

征韓論
牛島に於ける日清露
立正安國論を讀む宗教上の東方問題(二)
現住安心論
基督教界の革新
薩長政府豈急かに倒れんや
蓮門教
懷往事談新聞紙實歷○馬鹿趙高○お家騷動○錦織剛清○法令全書索引目錄
本所の大火　江東居士
社會學教授法　布川靜淵
二百年後の吾人を評し併せて强者の權利の競爭及び道德法律の進歩に對する元良中島兩教授の批評を讀みて
一二の所感を述ぶ(一)　布川靜淵
淚(韻文)　雲峯子

●評論第二十五號目次　六月五日發兌

博愛的愛國心の論
　條約厲行論者に警告す
强兵の箙豈に錢を要せんや
議會の爲すとなきは亦た一の國益なり
生死論
透谷北村君を吊ふ
願くは花下に死せん
地理學考○髯の自休○自主的外交
慈善事業の進歩を望む　北村門太郎
米國法庭の不法、同胞の屈辱　江東居士
二百年後の吾人を評し併せて强者の權利の競爭及び道德法律の進歩に對する元良中島兩教授の批評を讀みて
一二の所感を述ぶ(二)　布川靜淵

●評論第二十六號目次　七月廿四日發行

知行安合一論
大勢一轉せり
堂々たる宣言
日本人海外傳道論
戰爭論
哭北村透谷　賛田江東
東洋道德史の研究　布川靜淵
樹だま集　泡鳴子
利社會主義　得一居士
排佛教を讀む　綠陰

●評論第二十七號目次　八月十五日發行

臨機高嘯　天民
　一大時機を觀る○日本人外國傳道の聲○眼前の熱動○日本は大國なり○大才出づるの機會○南洲先生を景慕す○達人は至寶なり○深谷大澤厚地を遺せ○大才順らく山を出づべし○英普何れか心友○英語及日本語○來るべき議會○維新の大事業
岐阜縣治水策(中の二)　齋藤音作
偉人物　山月子

●評論第二十八號目次　九月五日發兌

朝鮮開革案　天民
(一)政閣(二)經濟及び兵備警察(三)教育(四)後藤伯(五)蒼海伯
朝鮮の教育制度を論して東邦協會の問に對ふ
朝鮮の傳道
臨機高嘯　天民
　戰に宗義なし○戰の特別なる天職○金融と細民と商人と義獻者○講學日常の如くせよ○對外硬○來るべき議會
日英新條約を讀む
はつ秋のたより　蘆壁
道德及び法律　布川靜淵
あまごひ　露葉
傳善者を護めよ　無光

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文學界

第二十一號　九月三十日發兌

みをつくし　孤蝶

紅閨の燈火　天知

題しらす　殘花

破三味線（韻文）　孤蝶

闇夜（續）　一葉

秋の露（韻文）　枯木

蕪村句選

其他時文には長帆子のやぶにらみ（其二、日本評論の宗敎論）○紅葉の紫○其他新刊の評くさ〴〵あり

定價一冊六錢○六冊三十三錢○十二冊六十錢○市外郵稅共一冊六錢五厘○六冊三十六錢○十二冊六十六錢○每月三十日發兌

發行所　下谷三輪町八十九番地　文學界雜誌社

發賣所　神田表神保町六番地　女學雜誌社書店

基督敎新誌第四號要目

十月五日發兌　定價三錢

敎會無宗派○奇蹟論○與神學者之書

田舍傳道

六合雜誌の無神論○市原ドクトルの實用敎育論

小女と風信鷄（詩）○天杯（詩）○戰時雜話

雜錄○小見欄○敎會報知

發行所　麴町區下六番町十三番地　基督敎新誌社

女學雜誌前號要目

開書凡そ七通　寄せらるゝ所ろの人は、云く樺山中將。云く、山路中將。云く、朴泳孝。云く、大島公使。云く、伊藤伯。云く、後藤伯。云く、井上角五郎氏。

時勢觀　云く、夢幻の人。云く、惜しまさるの今。云く、發見の道。三篇即はちこれ今回の社說。些さか、時勢に觀じて、現實直接の透察に警告せんとす。

少年敎育　一に題して日曜學校敎任者の心得と云ふ。即はち、第二回女子夏季學校に集まりたる當路者の懇談を概括筆記したるものとす。惣べて是れ多年經驗の說、語短かくして意義、頗ぶる長し。

僞善者を解す　外美內醜の僞德は、何に由りて惡むべきや。哲學審美學上、精細なる觀察を下して、明哲也。

熊澤蕃山　蕃山氏の傳紀、いよ〳〵佳境に入る。逸事の面白きもの一二。名聲赫々たりし趣き。閑居の姿及佛徒に對する意見、すべて此回に備はる。

廣告料及無料廣告

一行（廿七字詰）前金十錢
同　三回以上一割引
同　六回以上二割引

○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。

但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにして一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に雜誌十部注文を要し以上半部增さと定む。右

本誌代價

冊數	定價前金	市外定價郵稅共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊（半ヶ年分）	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊（一ヶ年分）	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

發賣所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

發行所　東京府北豊島郡王子村下十條八百五十一番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治　印刷人　堀口庄三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷（電話十九番）